

	<h1 style="text-align: center;">進取の気概</h1> <p style="text-align: center;">(校長室だより)</p>	<p style="text-align: center;">有田市立箕島中学校</p> <p style="text-align: center;">自主 友愛 剛健</p>	<p style="text-align: center;">R3・9・7</p> <hr/> <p style="text-align: center;">No.28</p>
---	--	--	--

令和3年7月31日(土)に、「少年メッセージ2021」和歌山県大会(主催:公益社団法人和歌山県青少年育成協会)が紀の川市の貴志川生涯学習センターにおいて開催されました。今年度の応募総数は和歌山県内で10,317作品、県内111校からの応募があったとのことです。箕島中学校からは3年生の楠瀬心美さんが有田地方代表として参加しました。18名の各地方代表のみなさんの発表はどれも素晴らしいものでした。ハイレベルな発表が続く中で、楠瀬さんは見事、金賞を受賞し、さらに上位の大会の出場者として和歌山県から推薦されることになりました。楠瀬さんは昨年につき2年連続の金賞受賞です。おめでとうございます。



以下に、当日の発表した原稿を紹介します。

共に生きる

箕島中学校 三年 楠瀬 心美

今もはっきりと残る、胸の真ん中を真っ直ぐに走る傷跡。十五センチほどあるその傷跡は、私が物心ついた時には既にあった。

「どうしてみんなにはないのに、私にだけ、こんな傷があるの？」

幼い頃、何度も母に尋ねていたのを思い出す。母はその度に

「生まれた時から心臓に病気があって、お医者さんが治してくれたんだよ。」と、私の手をとり、傷の上にあて、鼓動を感じさせながら話すのだった。幼い頃の私には、それ以上、知ることはなかった。

十五歳を前に、私はもう一度、病気のことについて母に尋ねた。「心室中隔欠損症」という病名で左右の心室を隔てる壁に穴が存在する状態であり、生後十一ヵ月で手術をすることになった。母は、当時のことを私に詳しく教えてくれた。

その頃の私は、母乳を飲む力も弱く、体重が平均よりも大きく下回っていた。泣けばすぐに唇が紫色になり、夜通し私を抱いていたようだ。手術にかかった時間は、およそ五時間。その時の光景を、母は鮮明に覚えていると語る。不安な気持ちで手術が終わるのを待ち続け、手術後、ICUのベッドで眠る小さな我が子が沢山のチューブに繋がれている姿を見た時、涙が溢れたようだ。その後、術後の経過も良く、今、私はこうして元気に過ごすことが出来ている。そして、母はもう一つ教えてくれた。

「今の自分があるのは、沢山の人の力や祈りがあったからだよ。」と。小児科の先生をはじめとし、お世話になった医師、看護師の方々に私は命を繋いでいただいた。もちろん、両親や祖父母には心配も苦勞もかけただろう。沢山の人の支えられ私は生きているのだと思うと、まぶたの裏が、熱くなるのを感じた。

二万八千八百一十一人。この数字は、令和二年の自殺者の数である。前年より、九百十二人増えている。なぜ、自ら「死」を選ぶのか。近年に見られる特徴として、SNSを使った誹謗中傷や、昨年は、コロナ禍で失業者が増えたことなどが原因にあげられる。私達が普段何気なく発信している「ことば。」それは人を生かし、時には人を殺してしまうとても繊細なものだ。だから、使い方を誤れば、簡単に人を追い詰めてしまう。そして、今も尚続くコロナ禍の感染状況は深刻化している。ある報道で、飲食店、観光業などの失業者が増えていることを知った。皆、理由はそれぞれ違っても、私には計り知れない程の大きな悩みが心を支配し、自ら命を絶つことを選んでしまったのだろうか。ニュースでそういった話を聞く度に、私は胸が苦しくなる。

私は考える。自殺者が増える社会は問題であると。一人一人、目を背けることなく考えなくてはいけない。「死にたい」という言葉のその裏側には、死を選ぶしかなかったが本当は生きたいんだという心の叫び声が聞こえる。

今、生きることが辛いと感じている人に聞いてほしい。あなたは今、孤独と虚しさで苛まれているかもしれない。それでも、あなたと共に生きたいと思う人がいるだろう。勇気を出して助けを求めてほしい。

私はあの時生かされた。今も尚多くの医療従事者は自分の身が危険にさらされようとも、使命を持ち多くの人を助けようと力を尽くしてくださっている。生きたくても生きられなかった命もある。私達は一人ではないはずだ。

何度でも言おう。生きることをやめてはいけない。どうか、思いとどまってほしい。私達の未来が、差別や偏見がなくなり、人権が守られ、そして、コロナの流行が終わり安定した社会が一日でも早く取り戻せることを切に願う。

共に生きよう。助け、助けられ、私はみんなと共に、今日も生きていく。